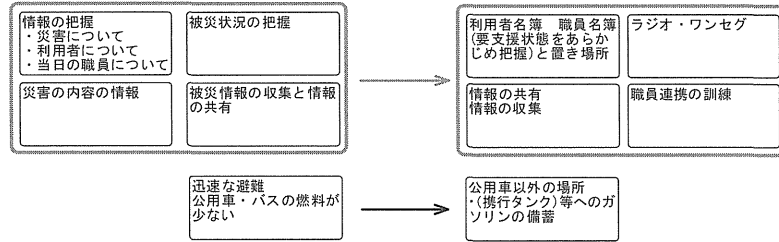
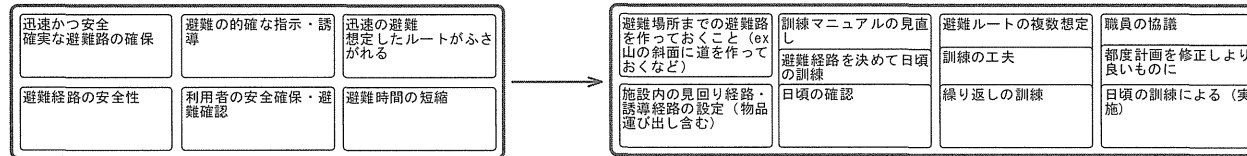


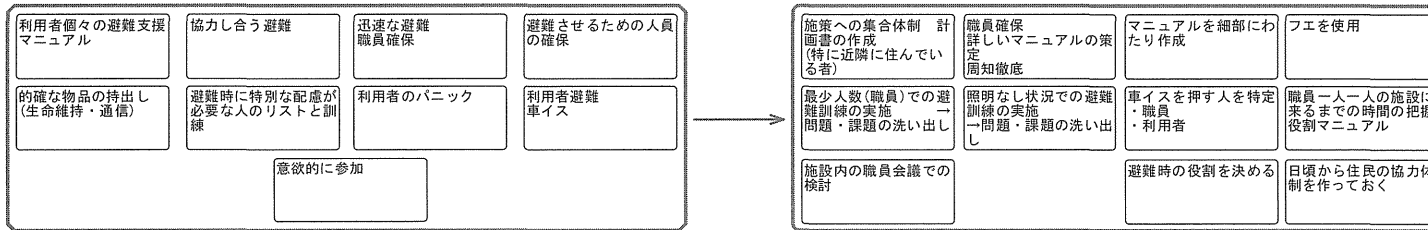
災害情報



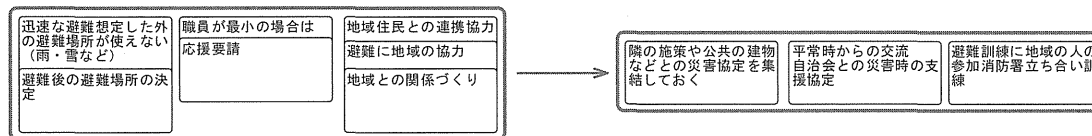
避難路



マニュアル



地域



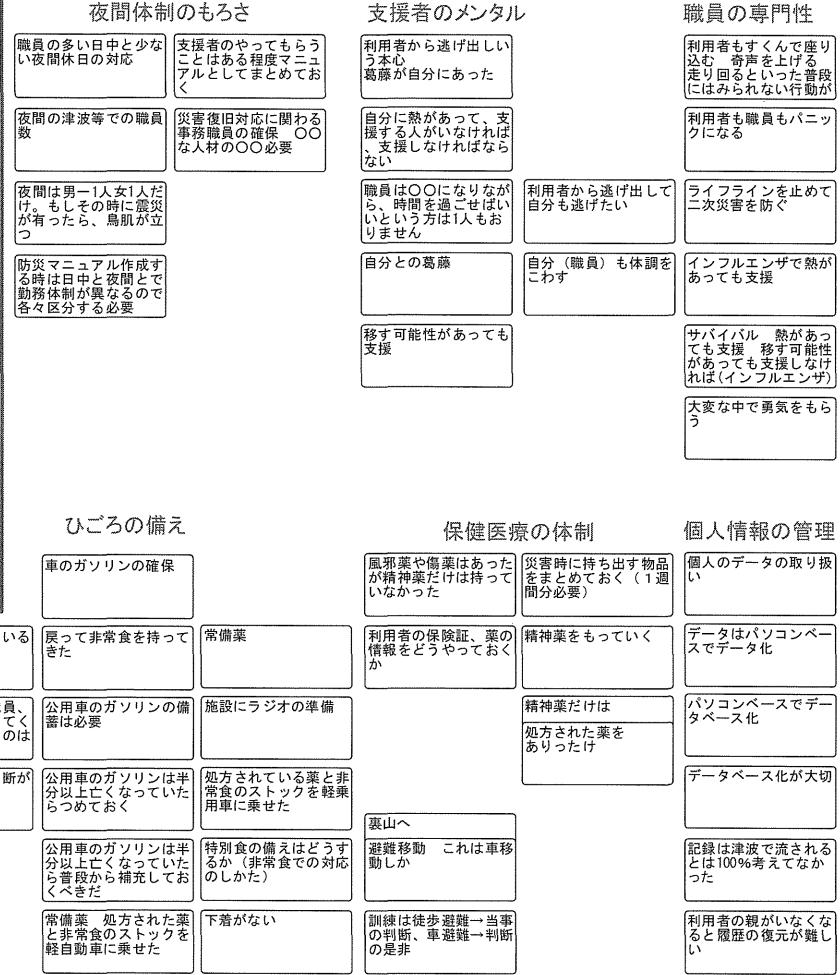
事業継続計画策定に向けてのボトルネックと解決策(ワークショップ③の成果): 2 班

【3班のワークショップ①から③の成果図】

訓練は実践なり！



がんばれ！職員！！



過去の災害経験を学び、災害イメージを共有し、知恵や教訓を紡ぐ(ワークショップ①の成果) : 3班

マニュアルの点検

訓練方法の明記	具体的な手法や内容が明記されていない
夜間時の対応が詳細に明記されていない	具体性に欠ける
	文面だけでなく具体的な行動・対応等を話し合う(定期的)
	安全措置が講じられていない
	避難誘導 救出に利用者の命を守ること職員 命を守ることがない
利用者の健康状態の確認と心のケア(具体性なし)	施設立地場所の危険箇所の確認明記
休日と夜間の震災への対応	今後原発事故発生時との連携継続
非常時の他法人との具体的な連携	災害に対する対応について 他周辺施設との打ち合せ

具体性

連絡	備蓄備品	教育
災害発生時の職員の集合規定がない	備蓄品目再検討	予防設置が不足
避難所リストの準備	緊急時の持ち出し品の具体的な場所の明記と全職員の理解確認	薬の確保
職員の連絡体制 震度5以上で自主参集	ガソリン・生活用水の備蓄	備蓄物資の定期点検・補充
在宅職員等との連絡	備蓄品機材等保管場所分散	備品に反射式ストーブ 携帯ガスコンロ、毛布などを加える
本部等の連絡	備蓄について何もない(明記されていないが食糧については3日分は確保)	簡易トイレ
職員の通勤経路の精度向上 徒歩、自転車使用	備蓄に対する保管場所や内容が明記されていない	災害発生時の時期にあった対応(寒さ対策など)

見直し

災害発生後の対応のみで長期に対する計画が示されていない	災害発生後の事業をどうするか仕組みがない	今後原発事故での避難時 定期的な緊急時の職員体制(確保)の確認
要援護者の受け入れ	福祉避難所としての訓練・備え	DDCAのサイクルがなされていない(計画が古いまま)
ボランティアの受入対応について	地域との防災時の対策 具体的な話し合い	定期的に火器設備等全職員の確認
	医療機関 行政との具体的な対応・連携	各職員の役割は定期的に変更する
		施設内安全の定期点検

現行の消防・防災計画の見直し(ワークショップ②の成果) : 3班

ボトルネック				解決方法				
場所								
避難場所の確保	利用者の生活場所の確保	安全な場所の確保	市町村や県福祉課との連携移動先までの手法を決めておく	避難場所を事前に決めて協力を要請しておく	公的施設の利用協定を結ぶ他施設からの相互協定			
移動手段	利用者の生活場所の確保	避難先の確保（プライバシーの配慮）	移動先までの方法を決めておく	新しい場所の準備				
人								
職員の確保	支援者の確保	利用者・職員の足の確保	他事業所との調整ボランティアとの協力体制の構築、地域との協力関係の確立	ボランティアの確保	知福協等の協力	長期にわたってのボランティア 他法人からの応援体制		
職員の確保			緊急時の職員待遇（身分保障）	緊急時の支援に入れる職員の移行調査	職員の家族への対応	行政機関、他施設との連絡・調整 可能範囲内		
職員の確保								
生活								
メンタル 物質								
支援資材の確保	情報 備品 共有 調達	衣・食・住の確保（日常生活用品を含む）	生活用品や介護用品の確保	水・食糧の確保	季節に応じた準備が必要 避難場所に応じた準備	災害対策本部や行政との連携	備蓄品の整備	ガソリンは半分になったら必ず給油しておく
生活の安定		日中プログラムの作成と運営	車	最低必要な衛生用品（紙オムツ・ウェットティッシュ等）	備品等の確保地域全体での備品の確保	行政との調整	飲料水・米・毛布等	
			職員（支援者）は自分勝手に行動しない	事務業務の遂行	事務用品や場所の確保	指示連絡報告を一本化しておく	支援者の確保通所サービスの利用	利用者中心の通所連絡の安全確認
利用者・支援者メンタルケア	利用者職員の健康	薬（特に精神薬）	パニックへの対応	行政機関や病院他施設から孤立する	休日の確保 カウンセリング相談支援	医療機関との調整をしておく	医療機関との連携・衛生管理の注意	非常持出しとして常に訓練。保管場所へ持出しとして明記
メンタル面精神面でのケア	健康維持（利用者・職員）	記録						

事業継続計画策定に向けてのボトルネックと解決策(ワークショップ③の成果) : 3班

【4班のワークショップ①から③の成果図】

備えあっても備蓄うれい有り

持ち出し品 ・保険証 ・精神薬 ・非常食	利用者の精神薬を持って行ったこと	公用車のガソリンは日 常時に半分以上に 公用車のガソリン 給油1/2で
避難時の食料 日用品・医療品なけれ ば代替できるものを考 える	利用者の薬 特に向精 神薬の準備 (避難時用 として)	3P 公用車のガソリン
ものが無い不便一日常 生活レベルに昇れない 覚悟	3日後の必需品 胃腸 薬 消毒薬 ハイター を薄めて	ガソリン満タン 公用車の燃料を普段か ら管理し満タンにする よう心がけ
2P(非常食) 2週間分ストック	2P利用者 精神薬	ガソリン 移動時の手段 ↓ 避難
非常食・水・薬(常備 薬)等の準備		車移動を考える 非常食は準備 公用車ガソリン

建物管理

3p (火災防ぐ) 元栓 だけ止めた
火災防止のためのボイ ラー停止・ガス停止
ボイラーの元栓を止め る
訓練でやっていなかった ことへの対応

黄門さんに学ぶ情報

4p (インフラ整備) 電気もなし~	ラジオ (情報)	利用者の〇〇情報をど のように日頃管理する のか 法人・施設の情 報も同様である	職員の連絡方法
PCデータのバックア ップ	通信手段(電話)が止 まった時の連絡方法(サ ブ)の確立	記録等のデータ保存	保護者・家族との連絡 方法
データベースの保護		8P(バックアップ)情報 データベース化を	

実は本音

職員の“自分との葛藤”
人は見れば手を貸すと いう人たちが多い
自分たちの施設も職員 がいっぱいなわけでは ない
誰でも被災地には入り たくない
汚い仕事からやってく れた
利用者から逃げ出して 徒歩で帰りたいという 本心
不眠不休
7p (利用者の力) バ ワーをもらう

訓練

火災中心の避難訓練一 地震・津波時も	災害発生時間での対応 日中だったので職員確 保→夜間だったらどの ようにすべきか	利用者全員の避難所確 保は難しい
2p(訓練)火災の訓練 は毎月	夜間帯での避難誘導体 勢の構築	3p(住む場所)避難所 探し
	夜間等(職員の少ない 時)の避難訓練の大切 さ	避難場所の確保
	3p(夜間時)夜の7時 とか8時とか	避難場所の確保 (避難日数)
		避難所探し (通路設定の大切さ)
		一次避難先 二次避難先

ボスの一声 初期判断

高台なければ高いビル で津波は上へ	職員それぞれの判断も 必要
避難の方法 徒歩?車?臨機応変に	避難までの時間(判断)
訓練? 実際はリーダーの強制 力	時間との争い
	1p(指示)館内放送 外 に避難

職員

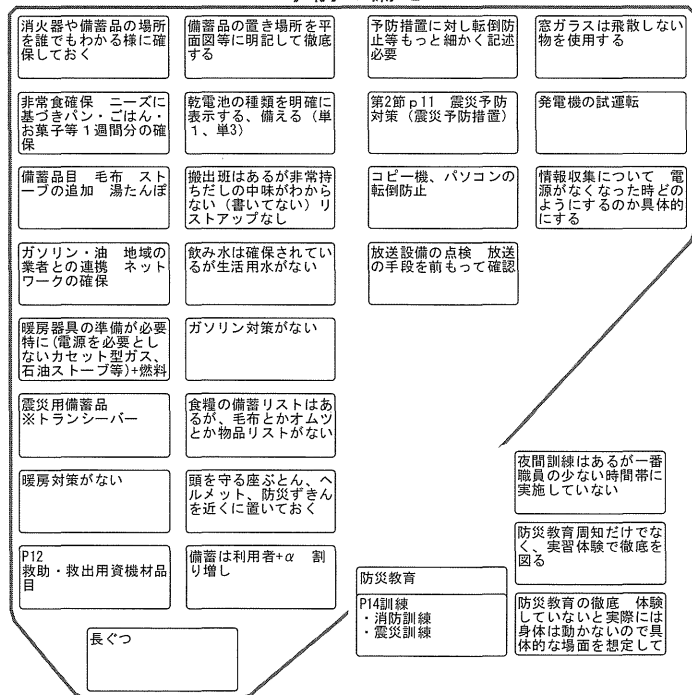
3p(安否) 安否を確認したい	利用者の多動行動への 対応 徘徊・奇声・尿 失禁 職員の健康管理・支援 者のローテーション	5p(利用者メンタル)多動行動を取ったり
屋間の発生 職員が いる 夜間・休日だと...	障害者 家があっても 帰れない	職員の健康管理
避難後の職員と支援者 との役割分担を明確に		対応職員の健康管理と いし

支援者

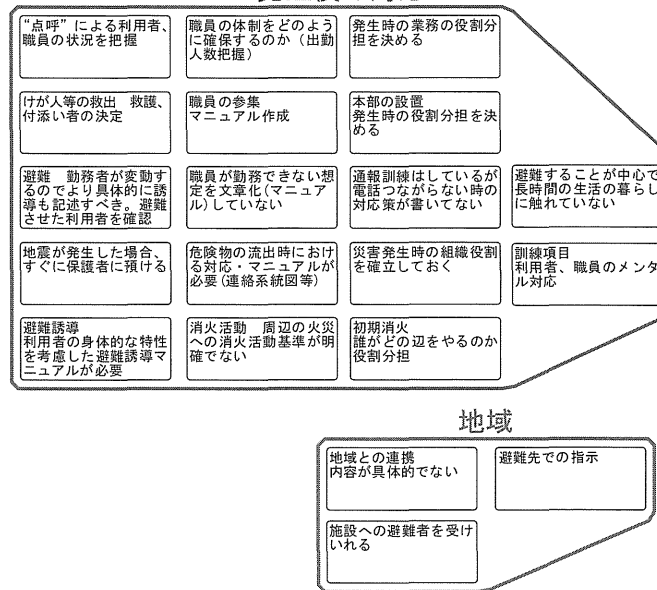
被災地に入る勇氣	他施設等からの支援者 の対応
支援者の受け入れ ↓ 何をしてもらうか役割	ボランティアの力 支援者
6p(支援受け入れ) 100人態勢で支援に 入って	

過去の災害経験を学び、災害イメージを共有し、知恵や教訓を紡ぐ(ワークショップ①の成果): 4班

事前の備え



発生後の対応



現行の消防・防災計画の見直し(ワークショップ②の成果) : 4 班

ボトルネック

(B N)健康・体調管理のため	体調確認		
職員の確保 専門職以外の応援	職員スタッフの確保 (ホラ吉む)	職員の確保	
	介護者		
障害者も同じ避難者と理解してもらう	施設利用者である事を避難所の皆様に認識させる	避難手段(移動手段)	(B N)情報管理のため

解決方法

健康面 バイタルチェックのための(体温計・血圧計・血糖値測定器等)	グループで行動し様子観察(体調悪くても自分では認識なし)	避難できる環境の方は同行(事前に確認) 避難場所と同様、協力を得る	ボランティア情報の一元化
職員の確保 ・人事の交流・研修	法人内地域間等で事前に定めておく		
家族近隣住民への介護訓練	福祉策の資格者リスト 専門学校との協定	利用者の家庭と協力して支援活動を行う	
利用者名簿・職員名簿を提示	手伝いできることは利用者と共に積極的に動く	◎目印 ・名札 ・ユニフォーム ・Tシャツ ・帽子等	バスの確保
			<情報管理と状況把握> ホワイトボードを使用して刻々と変化する事を表示・伝達

人

場所の確保	(B N)【居住】居住空間の確保	場所の事前確保	避難先(場所)の確保 (利用者全員ねる場所)
<住居>プライベートの確保	〇〇 広い 機動的 スペースの確保	②日中支援は？ 工場が使えない その他メニュー不定	

場所

スクリーン ダンボール ついたて 黒板等	<避難先にて> 簡易パーテーション (間仕切り調整)及びカーテン、シーツ類	解決のための事前協定	<住居> ①仕切りの工夫 カーテン ダンボール	②日中支援 メニューの多様性 専門性を活かす
エアータントの設置	移動手段の確保	連携し協力を得られるように事前に協定しておく ・行政・施設・病院	他の安全な施設に一時預ける	地域の人達の協力を得て集会所等利用する

物資の確保 物品の調達	飲料水の確保 調理ができない	衛生環境	トイレの使い方 水洗・洋式・和式
		(B N)<衛生面> 衛生管理面の充実	(B N)<食事面> 衛生的な食事を確保

物

避難先での調達方法を考えておく	食料品・薬・日用品・衣類・備蓄	<食糧確保>他施設・業者から提供(ネットワーク作り)	各施設の備蓄情報の一元化(各園域毎)
寝具・暖房・照明器具		発電機・ガスボンベ	インフラの確保電気・水・ガス
水・薬剤・排せつ施設用具	<排泄> 紙おむつと消毒・用薬品類+(予防衣やデイスボ)	<食事> 使い捨て用の紙皿等容器とラップ	通信手段 災害用ダイヤル・ラジオで安否情報流す

事業継続計画策定に向けてのボトルネックと解決策(ワークショップ③の成果) : 4 班

【5 班のワークショップ①から③の成果図】

災害前 1. 備えあれば憂いなし

避難方法	事前の準備	マニュアル
キャンプ場のコテージ	車両確保は大切。でも燃料なければ役立たず 公用車のガソリン	マニュアルが必要でも頼り過ぎるのは危険かも
車の移動は私は×と思う	ガソリン半分以上の車 普段の公用車のガソリンは半分以上になったら給油しておくこと	マニュアルの避難場所 避難訓練と時間を考えませんでした
物資不足 いただいたものは役に立った(使えない物もあったが)	公用車のガソリン給油(半分になったらつめる)	避難時訓練とかマニュアルでは実際と違うと...その時の判断
マイクロバス	公用車の燃料は常に入れておく	徒歩一車
	大変を〇〇 職員への車移動の際の指示 車移動の判断基準 避難してなければ全員のまれた	避難時間は把握 マイクロバスに加えて軽自動車も1台準備した 事前の避難所確保 避難所のスペース 一般の方と同じ(一晩でも大変)
		避難訓練はしていたけれど大地震津波は想定外 実際の避難は訓練(マニュアル)どころではなかった 避難訓練では何分かったかという記録だけで時間という検証は考えていなかった

災害直後 2. 憂いいっぱい災害直後

薬	非常食	災害直後の行動
薬の確保	非常食は準備していても持ち出せない	利用者の保険証・精神薬(そんなにならないだろうと判断しながら)を持って避難した
薬(向精神薬)や医療ケアが必要な方への対応は迅速	乾パンのみ刻み食べ方	電源で落ちる前に館内放送で職員に指示した
消毒効果のあるものは?	非常食2週間分	保険証薬などの持ち出しリストと簿機が必要
精神薬・非常食を車に積み込んで		災害直後の静め方
利用者の薬	非常食の持ち出し	電源で落ちる前に館内放送で職員に指示した
		深の水が引いているのを感じ、上に避難するよう指示した

大切な情報 ↑ ↓ 情報

安否確認、避難、態勢、保護者・家族との連絡はどうだった?	情報源として ラジオで情報を得る
家族との連絡	〇〇になったのがラジオです
連絡とれば	連絡手段が途切れたら居る人でやるしかない(長期戦は厳しい)
利用者全員を車に乗せた	ボイラーを止めた
これは車移動しかない	歩かせず車で移動を考えた
知的障害者も心が通じ合うこと	自分との葛藤
職員も不安 特別頑丈な人だけでは	障害者というのうちは流されなくても帰れない人ばかり

※「〇〇」は判読不可部

災害後 3. みんなの力で憂いなし

支援(工夫)	人手
応援Sは直接ではなく間接支援	個人情報をデータ化する
乾パンちぎって水につけて食べました	人脈派遣から物的部分
個人情報であるがデータのバックアップ重要	できた時「〇〇 やりたくない汚い仕事から〇〇…」
パソコンベースのデータ化	指示を出したリーダーがいたから良かったが不在だったら?
「特別にどうにか別の部屋を貸してくれませんか」	支援があっても職員がやらなければならないことがある
	偶然職員人数が多かったが夜間が男女計2名だけ
	職員の体調・精神面の管理
	職員が増える
	応援の職員、陰の力になってくれた
	人手が無ければ大変。負担を抱えるにも限界が

過去の災害経験を学び、災害イメージを共有し、知恵や教訓を紡ぐ(ワークショップ①の成果): 5 班

具体性			十分性			仕組み		
備蓄品			救助機材			施設		
予防・訓練			活動			情報		
カセットコンロ	〇〇備 (〇〇内で)	発電機 (携帯に使用できる物) 自家発電機の準備と使用方法を学んでおく	台車・自転車	個人情報等持出しリスト	火気使用設備等 維持管理 具体性	訓練 形から具体的に ・非常食を食べてみる ・避難場所へ	非常時の 指示・伝達経路を明確 に 形にする	メンタルケア 時間を 追って適切に行う
使い捨て ガスボンベ	ガソリンの確保 具体的に 量が半分になったら補充しておく	非常発電機	タンカ	タバコは指定した場所以外 具体性	施設内設備の理解 非常とされる設備について	資機材 取り扱い訓練	訓練の頻度	
卓上ガスコンロ 数台	暖房用燃料の確保 (タンク半分以下になったら給油。業者と契約しておく)	簡易トイレ (携帯) 簡易 トイレセットを数個準備しておく	生活用水確保用バケツ ・ポリタンク	自主検査及び消防用設備等の点検 具体性	備品の安全 取付点検	消火器使用の練習	管理者に対する報告 具体性	
飲料水・トイレ・洗面 用	各部屋に防災用LED ライト(10か所に設置) ソーラーライト駐車場の フェンスに	衛星電話	給水タンク (ポリタンク)	地震災害時の点検 看板、窓枠、物品のみ 具体性	備蓄品を器材は使用可能 な状態なのか、点検を 定期的に行う(使い方含む)	緊急時の非常持ち出し 物を1つにまとめておく	防災管理者の補佐 仕組み	
非常食 (すぐに食べられる)	ソーラーライト 駐車場のフェンスに	携帯が使用できない場合 1つの対応 (トランシーバー装備)		危険物品等の転倒 具体性	生活用水の確保(浴槽に 最低でも1/3ためておく、毎日)	非常時持ち出し (まとめて管理)		
非常用食品とくにあっ たかい物が食べたくなる	ランタンろうそく等の 灯り(備品)				お風呂の水を満杯にする			
寒さ対策の1つとして (反射式ストーブの他に 保温シートを準備)	煮沸する(料理)水が ほしい	反射ストーブ (石油)						
拡声器	防災頭巾	防寒用ストーブ						
						<地域>		
						171 災害用ダイヤルの 活用 (1.15月はNTT 無料で訓練)		
						電話機(無線)常時使用 できる(10万円)		
						周辺(近所)との情報交 換(延焼の可能性)		
						安否の確認手段について 複数の施設の場合にだ れがするか		
						地域(近所)との情報交 換(延焼の可能性)		
						携帯電話の一斉送信		

施設が使えない！

必要な物等！

(忘れそうだけど必要！)

解決方法

個人情報	利用者のデータ パソコン	利用者個人情報 (服薬・病歴・家族状 況・パニック)	定期薬を飲む	定期薬を持っていく 飲むためのコップ・水 を持っていく	他者から手伝ってもら う。個々の利用者につ いての情報を準備して おく(サポートブック)	非常時を想定しリス トアップしたものを準備 しておく	正確なデータベース (ツール)	
			はぐれた場合にどこ の誰かわかるように する	所属・名前を記入した バッジを用意しておく				
場所	設備の点検	障害者専用の部屋の 確保	水だけでなく高カロ リ一食(栄養)	胃ろう、衰弱を考 えると高カロリー液 エンジュアリキッ トなど持参	地域の方たちから障 害者について理解し ていただくこと	障害者の方(自閉症) の個別の部屋の確保	調べて対策人員数を 越えて故障のおそれ あり	仮設施設の迅速な 設置
交通手段	移動手段は	運搬手段			バスの確保 10人乗りが有効な 場合もあった	車・リアカー・自 転車	送迎バスなどの借 用業	
安全性の確保 (人員)	Pマンパワー 人手	職員	人手	常日頃の訓練	連絡体制・召集方 法の確立	被害なかった施設 や団体等の支援(でき れば経験者)	支援先との情報共 有	地域ボランティア 行政の協力
			お風呂に入れる	お風呂の情報				
			障害者の親が生活 できない	在宅の支援(食べ 物の確保)支援・買 物他				

事業継続計画策定に向けてのボトルネックと解決策(ワークショップ③の成果)：5班

【6班のワークショップ①から③の成果図】

大変だ おちつこう!!

被害の情報収集		避難の状況	
ラジオ情報の確保	少ない職員体制での避難	即座の避難指示と利用者への対応「園庭、外への避難」	訓練と違い奇声を上げる、走り回るという行動に出る
ためになったのがラジオ	山田さんの水が少しずつ引いているのがわかった。その後水がぶわわっと来て水をかぶって	避難訓練と本来の避難は違う	利用者の反応に対して訓練では限界がある？
安否確認の情報収集	避難所も5、60名入れるスペースはないよ	緊急時はどのような状況であってもまず避難を最優先させる	ハード面の対応
安否確認	訓練どころではなく強制的に、時間との争い	避難後また戻る行為はダメ	ガス等による二次災害の防止
車の移動の危険	有事の際は訓練どころでは	夜の7時、8時に地震、津波が来れば...	ボイラー、ガスの元栓を止めに、避難訓練でやっておかなければ
	日常がサバイバル	利用者もすぐんで座り込む	建物の安全管理

大変だ その前に!!

記録情報	避難時の持ち物	
パソコンデータベースのバックアップの確保	下着	非常食の保管を出しやすき方法
避難所の選定	日用品の確保	流動食、乾パンをちぎって口にしてあげた
避難所探し	布団・寝具・衣類の準備	非常食は用意があっても持ち出せない
パソコンベースでデータ化	個人情報保護法のカベタ化	非常食3日以上
パソコンベースでデータ化	個人情報の管理(保管と活用方法)	2週間くらいの非常食のストック
	記録がすべてなくなった	公用車のガソリンは半分以上ならつめておく
	公用車の燃料の確保 半分以下になったら給油	公用車のガソリン
		薬の持出し
		利用者の薬等
		日赤が来てても精神薬は持っていないだろう
		処方されている薬の持出し
		避難時の持ち物 保険証 非常食 薬
		避難時の持ち出し物 保険証
		被災時の薬・非常食の確保 持ち出し方法
		避難時の持ち物 保険証 非常食 薬

大変だ みんなで がんばろう

職員態勢	衛生関係	外部からの人的支援	支援への協力が得られなかった
一般の人と一緒に奇声をあげない人があげたり多動行動を取ったり	汚い仕事を率先して行う	外部からの応援の受け入れ方(依頼等の内容)	電気もつかないうちも大変だから
奇声をあげない人が上げたり〇〇行動を取ったり	感染予防対策 隔離	わかった頃に入れ替え	
被災後の避難所を探すのは難しい	避難生活の長期化に伴い問題行動の表面化	支援者 陰の力 トイレの掃除等	
	非番職員の集め方		
	最小限の犠牲にとどめる		
	協力者の支援		

過去の災害経験を学び、災害イメージを共有し、知恵や教訓を紡ぐ(ワークショップ①の成果): 6班

安全の確保

発生時の安全の見守り、声かけ
地震発生時の安全措置 地震直後一職員の身を守ることに同時に利用者の安全確保を行う
利用者についての具体的な計画が未記入

備蓄備品

備蓄品の品目を具体的に記載する	暖房などの用具の確保	備蓄品の点検は具体的に期限を設定する	備蓄品利用者の食事状態に合わせた食料品の確保 おかげ等	緊急持ち出しの品目についてなし(薬等)
非常食品も確認	公用車のガソリンの確保 半分にしないなどの周知	ガソリン確保対策の明示(残量半分以上を常に確保)携帯タンクでの備蓄	施設車両 ディーゼル車を確保する 軽油であれば専用タンクでの保管が(可能)	利用者、施設の基礎データ管理
備蓄品でガス・電気が使用不能となった場合の備えとして、炭やカセットコンロ等緊急時に使用できるものの準備をする	DVDプレイヤー ・DVD ・CD ・I P a d	こだわりグッズ ・ゲーム ・バッテリー ・本	石油ストーブの具体的な台数確保(寒さ対策)灯油の確保	薬(精神科薬)の確認・確保
備蓄品の種目不足	食料 利用者のこだわり	毛布	寝具類の保管	建物物倒壊時の避難場所及び生活場所の確保
	ガソリンの備蓄について(メーターの半分以上にしない)	備品 薬3日分の処方薬	予防措置の具体化と不足がある薬・寝具・ガソリン・通信・避難所等	

防災計画

地域関係機関との連絡調整の確保	関係各所との連絡(応援体制)	災害時の地域との連携に関する取り決め
職員への連絡 多数の場合は時間がかかる	地震発生だけの計画である津波その他の計画がない	地震に対する防災計画の策定
職員の召集方法	避難の対応マニュアルの策定がない	施設の状態の広報について(ラジオ局への連絡)
災害時優先電話の明示	事前非通知の避難訓練を多くする	災害時の対応マニュアルが施設としてない給食部門があるのみ
携帯電話の確保	年1,2回の集合訓練の実施	避難方法(徒歩・車など)も必要なのではないか
	役割を細分化しすぎて担当者不在の時にどうするか	少しずつ消防・防災計画の見直しを行う
	職員全員が出勤している時の計画	防災教育・消火器等の設置場所の確認・使用方法の訓練
	災害時の指揮命令方法	

ボトルネック

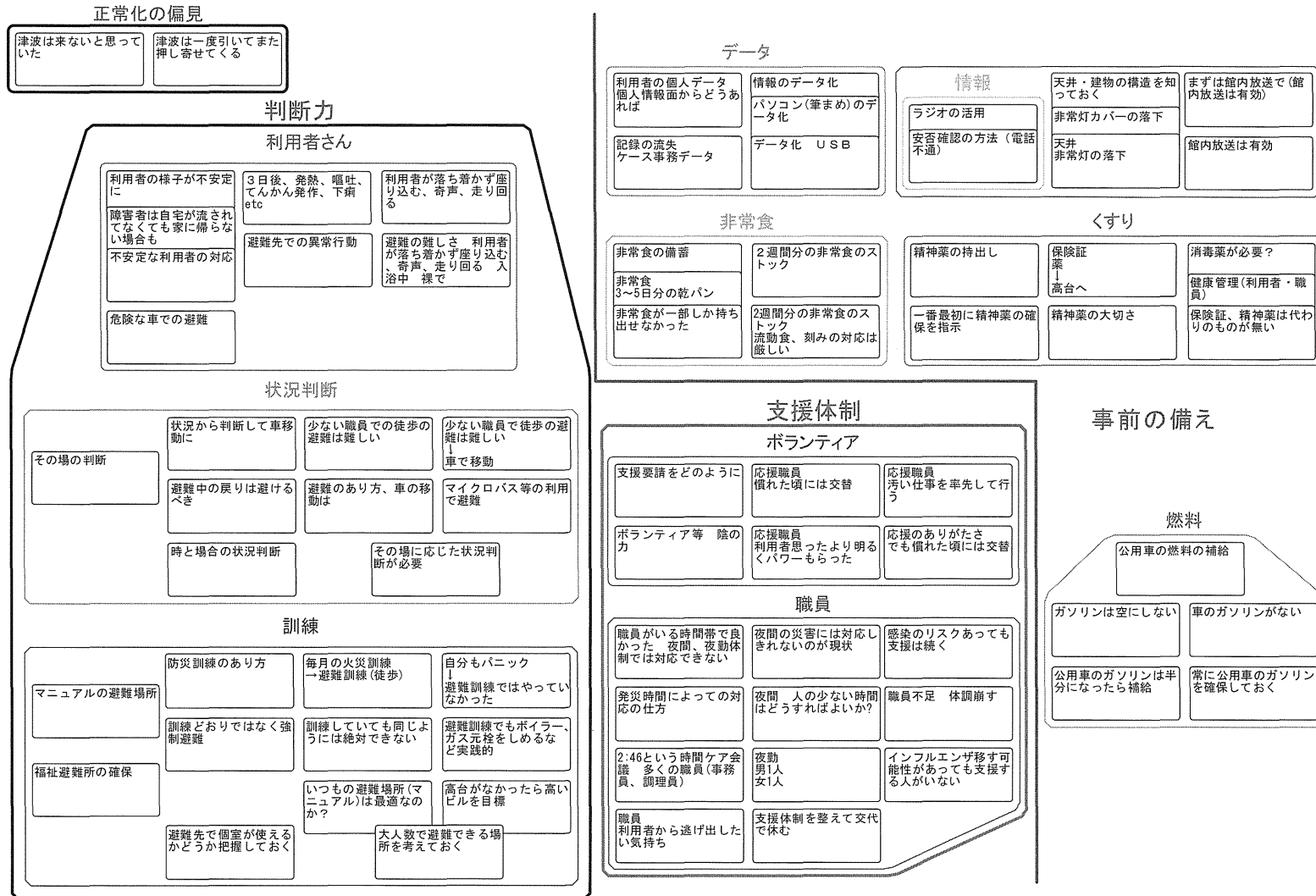
在宅者の情報	情報登録	利用者情報の不足	情報提供 情報提供の手段が不足する可能性あり
事前の福祉避難所の指定(市)	食事の提供 食材の提供確保	食料品の不足が考えられる 非常食	支援物資の確保
要保護者の状態・人数がわからない	生活水・飲料水	非常食等備蓄品	水の確保は必要か
入所者避難者の生活空間の確保 受入可能人数の想定・計画	スペースの確保	寝具等の予備の確保 寝具	地域の方の住まいの確保
落ち着いていられる場所 個室もしくはそうなもの	布団や毛布の確保 毛布・たたみ等の不足が考えられ	ベッド	身障用トイレ
支援者の確保	医療機関とボランティアの連絡・連携 看護技術のある方	職員の人数の確保・職員の参集	治療食
感染症の予防 衛生管理	薬	石油ストーブ・カセットコンロ等の燃料不足が予想される	
【解決策】 流動食・減塩食	マスク	利用者だけでなくその関係者も避難してくる	
消毒薬・オムツ・非常用電源・自家発電機・ガスコンロ	ゴム手袋	暖房・調理等のためのものがしやうでなくなる	
	連絡手段	避難してきた人たちの外部への連絡手段が確保できない	

解決方法

事前準備 食事・実際に見学してもらう	要保護者の個人情報を知る	テレビが視聴できるような避難の受入場所に予め配線等を行っておく(ラジオも含む)	サポートブックの活用	個人ファイルを作成しておく
行政との連絡調整 予定数を事前に共有する	入所者と避難者の生活場所を指定しておく地域との協定作成	防災計画の中に参集方法を明記する	見通しを持って備蓄する	非常食の備蓄を避難受入可能可能な人数分を想定し準備する
行政との契約により情報の共有	避難者を支援する職員人員を確保・計画・訓練	普段からの行き来(開かれた施設)	保管場所 ペットボトルなどすぐに提供できるものの準備をしておく	灯油・カセットボンベなど予め備えておく
【解決策】 パーティション個室 CD・DVD・ビデオ・本	居室を1名位ずつ多くする 訓練棟の活用	リフレッシュ用品	予備布団の活用	
	どこの場所を利用するのかを決めておく	ラジオ・PC・TV DVD・本の保管		
ボランティアと緊急時契約等の仕組みを作成	専門家のスキルアップ	【解決策】ふたりの専門家のSV体制をつくる。 〇〇〇の担当(医師)。 〇〇〇〇までの確保		
石油ストーブやカセットコンロ・炭等の器具・物品を準備しておく	簡易の入浴設備	医薬品・仕切り		
電話会社などに予め連携をとり、緊急電話の設置を考えておく	【解決策】 FaceBook メールなどで情報を取得 親の会のネットワーク			

事業継続計画策定に向けてのボトルネックと解決策(ワークショップ③の成果) : 6班

【7班のワークショップ①から③の成果図】



過去の災害経験を学び、災害イメージを共有し、知恵や教訓を紡ぐ(ワークショップ①の成果): 7班

備蓄の調達

備品			薬	ライフライン	
備蓄品が一か所でない、どこにあるかわからない	備品管理についての記載がない	食材の備蓄数量献立	処方薬調達手段の確保(協定等含む)	生活用水(保存方法)雨水	日常的にガソリンの保存は難しい。どのように確保しておくべきか
備蓄品リストがない	備蓄品の数量の明記がない	定期点検 備蓄品名・常備薬等のチェックシート	「福祉避難所」的に位置づけるためには、何を整備すべきか(蓄電機・発電機)	生活用水確保一井戸ポンプー非常電源ーガソリン確保	燃料に関すること ガソリン・灯油・重油
	備品の数量などが明記されていない	非常用食料 缶詰 流動食	厨房の冷蔵庫・冷凍庫の電源	防寒 電源不要のストーブと燃料備蓄	燃料確保(事前に協定結ぶことも含め)

伝達・確認

連絡手段		
安否確認の具体的な方法 電話不通の場合	情報収集・伝達 「連絡網」の他一斉メールやSNSの活用している	通所施設の送迎開始に判断をどこで(被害がなかった、軽微な場合)
連絡の具体的な方法(外出時)	安否確認手段についての申し合わせ(有効な手段)	
施設外にいる等直接指示を受けられないグループの行動指針	緊急時、避難カードを作成している	

情報	
個人情報の持出しと管理	緊急連絡先の持出しと管理
服薬内容等、保健情報の持出し	

職員 平時・非常時

職員教育	体制	
防火・防災教育の具体的内容が示されていない	被災への援助・協定については記載があるが、被災した場合の記載がない	被害程度に応じた体制を明記する
職員の教育	職員参集体制の基準 地震の場合に震度5弱or5強など	避難先での行動
	「避難訓練」計画・実施が全職員の参加で実施 職員が少ない時の訓練はどのように	

これも大事

緊急対応マニュアル(所在不明時)を作成、訓練している	自閉症の人の避難場所を決めておく
----------------------------	------------------

現行の消防・防災計画の見直し(ワークショップ②の成果): 7班

ボトルネック				解決			
マンパワー専門職員	支援者確保	支援者	人手の不足	関係機関への依頼	県市町村と連携してボランティアを確保する	他福祉施設との事前協定協議	
				福祉団体への要請	職員教育スキルアップ 専門性の向上		
				行政・病院へ依頼	医療機関と事前に協力体制をつくる		
医療体制	体調不良などの緊急時の対応						
看護師							
みなさんのストレスを軽減させる				避難所内でのレクリエーション活動を準備する			
居場所・個室	プライバシーの確保のしきり(ダンボール)	プライバシーの確保(個人情報)	トイレ	体育館を仕切りプライバシーの保護	プレハブスペースハウス	ポータブルトイレの確保	避難スペースの確保をする(日常備品等の片づけ)
食料・日用品・利用者の増加	物資	物資の不足	寝具(毛布)	行政へ依頼	県市町村と連携して物資を調達する	行政の早急な要請 救助要請制度	
電源	衛生用品 簡易トイレ トイレトイレットペーパー ティッシュペーパー	毛布 タオル	飲料水・生活用水	発電機(燃料)蓄電器	利用者、職員の増加を見込んだ備蓄	燃料(灯油・ガス) 反射板ストーブ 木炭 ガスコンロ(ボンベ)	
福祉事務所としてのルール作り	受入マニュアル	職員配置体制					
既存の利用者へのサービスは一時的に低下することに對しての申し合わせ	施設建物・備品・設備等取扱や生活面でのルールをあらかじめ決めしておく	要支援者のデータ	受け入れ調整の確認(窓口・手順・退去等)	マニュアル化と研修	防災教育の実施	施設・保護者から取り寄せ	
緊急時の役割分担の明確化 情報収集担当(受入)涉外担当は欠かせない	支援内容の優先順位の明確化(従事者の数によってできるできないの判断)						

事業継続計画策定に向けてのボトルネックと解決策(ワークショップ③の成果): 7班

資料4 各班のワークショップによる成果発表の要約（WS①～③×7班分）

ワークショップ①

「過去の災害経験を学び、災害イメージを共有し、知恵や教訓を紡ぐ」

【1班】

「やっときゃよかった」「とにかく逃げよう」「やるっきゃない」の3つにわけました。

まず、「やっときゃよかった」なんですけれども、先ほど出ていたデータのバックアップ、あと形だけの避難訓練ではないようにということ、備蓄品の管理、非常持ち出しというもののほかに、建物、古くなったりすると壊れたりするので、建物のリスクマネジメントということと、あと先ほど、車で逃げるとかっていうのがあったんですけれども、みんなが逃げるための公用車はあるのかとか、誰がどの車に乗るのかなど決めてあるのかなどという意見が出ました。

「とにかく逃げよう」は、どんな時間帯でもどんな状態でも逃げられるようにということと、あと逃げ遅れを出さない。戻って津波で亡くなってしまった人とかもいるので、戻らない。時と場合の判断をしっかりとするという意見が出ました。

最後、「やるっきゃない」は、避難所の確保、衛生管理、水・食料の確保です。水では、生活用水の水はタイムラグがあるので、生活用水をためておくべきだという意見が出ました。あとは、ボランティアの方が入った時に、何をしたらいいかわからない状態を避けるために、支援者の上手な受け入れが必要だという意見も出ました。あとは、大変な状態ですけど、職員・利用者、全部の家族の安否確認をしていかなければならないのではないかとという意見が出ました。

【2班】

時系列でまとめさせていただきました。

まず、最初、「練習第一」です。いくら準備しても憂いがあるよってということだったんですけれども、練習をきちんとやないと、当日、やっぱり大変だということで、それが一つです。それから今までの班でお話に出てこなかったのも、「非常持ち出し品のリストアップ」が必要だよと。どんな災害があってもこれだけは持ち出しましょうというリストを作って、それがどっかにまとめてあって、それを持ってすぐに出るという。これは、薬だけではなくて、そのほかにも保険証だとか、いろいろなものを、きちっとリストアップして、持って逃げましょうというようなことが大事なかなあと。

次に、「ブレイク・ザ・正常化の偏見」です。正常化の偏見をなくして、頑張っってやりましょうということですね。災害が発生すると時間がない中での対応がとっても大事だよと。それから少ない職員、日中であればいいんですけど、夜間であれば少ない職員での避難をどうするかということも含めて、実際に災害が発生した場合には時間との競争をしながら、

きちっと利用者の命を守る、安全を守るという形でやっていきたいと思いますという事です。

最後には、「愛はみんなを救う」と。これはボランティアの方、職員、利用者、全ての人間、それからご近所力っていうのがありましたけれども、そういったものを全部含めて愛でやっぱりみんなを助けて、そして今後も一緒にやっていきたいと思いますという事です。そしてまた、職員のメンタル、利用者のメンタル。それからボランティアの方たちに関しては、来て1週間だとなかなか覚えられないという話でありましたけれども、来た人たちに「じゃあ、あなたはこれをやってください」って、指示する体制がきちっととれているかということも話題になりました。それから情報、ラジオしかなかったっていうことなんですけれども、それだけではなくて、例えば、ボランティアに来た方だとか、ご近所の方だとか、自衛隊の方も来たっていうことでしたので、そういう人たちからいろんな情報を聞きながら、対応していくっていうことも大事なんじゃないかということなんです。それから、職員の健康管理ですね。インフルエンザになったという記述がありまして、職員の健康管理が大事です。職員が倒れてしまったのでは何もならないわけですから、職員の健康管理もきちっとやっていきたいと思います。それから、消毒液でハイターを使ったお話がありましたけれども、そういったこともきちっとやっていきたいと思いますという事で、「愛はみんなを救う」っていうことでまとめさせていただきました。

【3班】

まずは、「訓練は実践なり」ということで、ただ訓練で終わらせるのではなくて、きちんと実践につながるようなことが必要んじゃないかということ、マニュアルであったり、方法、判断、あと2次災害への対応、安否確認、情報等のカテゴリにわけて議論しました。

次に、対応するなかで、夜間体制のもろさであったり、日頃の備えの抜け落ちであったり、そういった話も出てきて。さらには、職員のメンタルなどところでの本音みたいなものも見えて、自分との葛藤があったり、できればもう逃げて、自分の家に帰りたいていうような話もあったわけですね。ただ、そういう中でも、職員の専門性っていうものがやはり非常に光って、県外の職員の方でも非常に汚い仕事を率先してできたのは専門性に限るということで、「がんばれ職員」というタイトルをつけさせてもらいました。さらに、備えとも関わってくるんですけども、やはり保健医療の体制だったり、精神医学の話もありますし、個人情報の管理っていう問題もあったり、そういったことをひっくるめて、やっぱり生きたネットワーク体制を作っていかなければ、なかなか訓練だけでは乗り越えていけないということで、この3つのタイトルにまとめました。

【4班】

まず、「備えがあってもうれい有り」です。あともう一つは「ボスの一声」っていうふうなことと、「黄門さまに学ぶ」っていうことと、こちらのほうにいろんな本音、書けな

いけどいろんな本音があるんだなって。人がいないし、早くうちに帰りたいとか、いろんな本音があるっていうことで。

「うれい有り」は、やっぱり先ほどの皆さまが今言ったように、完璧ではないけれども8割方は備蓄。3日間とかね、監査もありますので、今までも備蓄していたんだと思います。そういう中でいろんな準備しても、やっぱりこれぐらい大きな震災になるとなかなか「憂いなし」にはならないとうことを頭に入れながら、いろんな想定外のこともしながらきちんとやっていこうということですよ。

訓練も避難訓練を、年に2回やっていると思うんですけども、うちの方には来ないだろうってというのがちょっとあって、職員も真剣だって言いながらも、しょうがなくてやっているようなところもあったと。このへんももう一度見直すことと、夜間になったらどうしようかっていうこと、本当はこれが一番切実だと思います。

何を言っても「ボスの一声」、これの一声で助かった人、助からない人があって、このボスの一声っていうのは初期判断ですね。それは大事にしていかななくてはならないし、初期判断ができる訓練っていうんですかね、皆さん、いろんな訓練をしないと、その初期判断を間違ってしまうのかなあと。

「黄門さまに学ぶ」って、これは水戸黄門の話です。水戸黄門って最初のいろんな問題が起きて、情報をもとに解決していきます。そのストーリーに似ているために「黄門さまに学ぶ」っていうことで、タイトルをつけさせていただきました。

最後に、本音がいっぱいあると思うんですけども、そのへんの本音を、これからおのおの、事業所のほうで本音を出し合いながら、いい防災計画ができればいいなあとと思います。

【5班】

時系列で動向をイメージしながら三つにわけております。

第1段階が、「備えあれば憂いなし」事前の準備が必要だということ、マニュアルとか、避難方法、その中で車両の確保だとか燃料だとかいろいろなものがありましたので、そういったもろもろの準備、備えがあれば憂いがないぞという部分でまとめました。

第2段階ですが、災害直後になります。ただ、とはいうものの、やはり今回が想定外だったように、いかに準備しても憂いは起きるぞということ。前のグループでもありましたが、薬とか、非常食の持ち出しなど災害直後の行動、これも事前の準備、実際にマニュアル通りの行動ができたのかっていう部分について、見直しも必要だろうなと思います。

第3段階では、「みんなの力で憂いなし」。これは災害後で、やはり長期戦になりますので、人的マンパワーとか、どういったところに支援が必要なのかっていう、そういったいろいろなことが出てくると思います。それには協力体制がかなり必要になってくるだろうなと思います。その中でも個人情報ですとか、そういった情報をきっちりと正確に把握するような仕組みが必要になるだろうと話しました。

【6班】

タイトルにちょっと知恵を絞って、「大変だ、その前に」というのと、「大変だ、おちつこう」と、もう一つは「大変だ、みんなでがんばろう」ということで、かけ声ふうにしてまとめてみました。まとめ方はいろいろ出たんですが、時間軸でまとめてみました。まず、震災、あるいは災害が起きた時に、起きる前に事前に準備できるものはこういうものがあるんじゃないかっていうことで、お薬だとか非常食とか、データ化しておくっていうことも、いざあった時にはもう手遅れになってしまうので、事前にそういったものは準備できるんじゃないかと。

あと「大変だ、おちつこう」というのは、いざ災害があった時には、利用者側の安否確認だとか、ハード面の対応、避難所を確保するには、事前に確保しておくということもあります。

それから、災害があつて、どうやっていくかっていうところで職員の出勤体制ですね。いざ職員がでてこれない時には、残った5人、6人の職員でどうやってまわしていくかっていう職員体制、あるいはその避難所の衛生環境だとか、そういったのをどうやってもっていくかっていうこと。また、自分たちではなかなか大変な時の応援態勢を、例えば、行政さんだとか地区の関係部署との連絡を密に取つといて、人的な支援とかそういったものをその後に行っていくかということでもまとめました。

【7班】

まず、一番、最初に「事前の備え」というテーマで一つまとめました。その中で一番重要だったのが、精神薬とか保険証とか、医療関係のものを持ち出したと。この通所の施設・入所の施設でも、薬が不足して困ったと。薬を備蓄することも当然できないですし、入所の施設であれば、ちょうど昨日、震災の前の日に通院して1カ月分もらったとか、逆に明日通院の日でお薬がないとか。それから通所の施設ですと、朝夕の薬が、何を飲んでいるかわからないとか、お薬手帳を家庭で保管しているとか、そういうことで、薬についてはだいぶ困ったということがありまして、事前の備えの中の薬が重要視されました。また、当時燃料が不足していたと。あとは、最後のほうにあった情報のデータ化と。個人情報の関係、それから一つ出されたのが、施設の保護者として、お母さんの名前が届けられていると。その場合に、安否確認などの面で、世帯主はたぶんお父さんになっていたのだから、安否確認ができずに困ったと。また、役所に聞いてもなかなか情報を出してくれないと。そういうこともあつて、個人情報の関係もありますけれども、情報のデータ化ということが一つ出されまして、「事前の備え」として、一つ大きなくりにさせていただきました。

それから一つは、「支援体制」ということで、当事者職員の方、それからボランティアとして入った応援の職員の方と2つにわけさせていただきました。当時、金曜日の午後ということと、ちょうど会議もあつたようで、多くの職員がまだいた。それが本当に夜勤、夜だったら、大惨事になっていたんじゃないかという、すごい危機感がありました。ボラ